

## 武蔵野日曜聖書講筈

## 人の子は枕する所なし(2)

—マタイ伝第8章18～27節—

1993年10月3日

小池辰雄

どこでも枕 死者は葬儀屋に 棄て小舟 大変な霊止 キリストに在って力が内住 キリストの御腕を枕として

## 【マタイ8】

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずこにゆき給うとも、我は従わん』20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人の子は枕する所なし』21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠りい給う。25 弟子たち御許にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡なぶ』26 彼らに言い給う『なにゆえ臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁いましめ給えば、大なる風なぎとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従うとは』

## ●どこでも枕

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。

「彼方の岸」というのはガリラヤ湖の北の方の岸のことをいう。

19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずこにゆき給うとも、我は従わん』  
ペテロもよくこういったことを言う人です、「どこにいらつしやつても、ついて行きます」と。  
意気込みは悪くはないけれども、そうすると、

20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人の子は枕する所なし』

「枕する所なし」とは、



「一定の宿はない」

ということですが。ここは自分の寝る所だとは決まっていなくて、ということ。ということは「どこでも枕とする」

ということですが。人に呼ばればそこで寝るし、至る所、野原であろうと、山の上であろうと——「石を枕に」という言葉もありますが——キリストがどこでも枕にするということは、どこでもキリストには神の懐ふところなんです。至る所、彼が枕するところは神さまの懐です。だから、どこでも枕する。一定の枕する所という、相対的な一定さはひとつもない。それが絶対的な無の世界です。

キリストのことを私が「無者」と言うのは、そういうことなんです。いわゆる立場がない。無立場なんだ。無立場な人は至る所を自由自在に立場にすることが出来る。我々の在り方も、そのような大自然のような自由さを持つこと。自分の考えなんてものはない。そういう在り方が本当に無即無限無量という在り方なんです。

### ●死者は葬儀屋に

21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』

22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬ほうむらせよ』

これはどの聖書でも、ドイツ語でも英語でも、訳はみなこういうふうになっている。ギリシア語の原文もそうなんです。けれども、本当はおかしい。

「死にたる者にその死にたる者を葬ほうむらせよ」

ということとは本当は意味をなさない。

「死者は葬儀屋に任せよ」

ということなんです。キリストは何も変なことをおっしゃらない。

「死にたる者は葬儀屋に任せよ。汝は行きて福音を伝えよ」

と。キリストは他でそのようなことを言っていってらっしゃる。

私には「死」という言葉はない。「往生」です。往きて生きる。私が地上でお終いになったら、

「小池先生は死んだ」

と言わないでください。

「往生した。別な世界に行きました」

と言ってくれ。私は死なないんです。

「我を信ずる者は死なない、生きている」

というような言葉がヨハネ伝にありましたね。あの通りです。キリストも死なない。墓はひとつの門で、その次に甦よみがえった。甦るといふことは、実は新しい霊体となって進んで行つたことです。我々キリスト者は死なない。いわゆる「死ぬ」ということはない。そういう積極的なことです。彼方の世界に進んでいく。ヒルティも、



「自分の死というものは死ではない。別な隣りの部屋に行くようなものだ」と言った。ひとつも悲しくない。万歳なんだ。

キリストは、

「死者は葬儀屋に任せよ。お前は福音を説け」ということなんで、我々は死を知らない人間です。

「人の子は枕する所なし」

とは、どこでも枕とすること。一定の所がない。

「至る所で楽に寝る。そこは神さまの懐の中だ」

ということです。

「一定の枕する所なんか持たないぞ、どこでも楽に眠れるぞ」

ということ、決して消極的な言葉ではない。非常に積極的な言葉であるので、間違えなように。

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許にゆき、

起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは上うへぶ』

海に大なる暴風が起こって舟が沈みそうになったので、皆が

「助けてくれ！」

と騒いでいたら、キリストは眠っているんだ。

「イエスは眠り居給う」

と。嵐の中で舟がひっくり返りそうでも、キリストは眠っておられる。「眠っている」というのは神さまの懐に入っているから、神さまはこれを絶対に沈めない。キリストの信というのうつつは現なんです。

私はこの頃、「信仰」という言葉は嫌いなんだ。これは「神交」、神との交わりの世界です。ということは——「神」はキリストです——キリストとの交わりの世界、キリストと一つになっている世界です。キリストと一つになっていけば、これはもう絶対に安全です。どんな事があっても大丈夫。

キリストは神さまと一つだから、嵐の中で眠っている。これも大丈夫というわけですが。とにかく、疑いと怖れはいかん。本当の平安というのは力がある。上からの力を頂いている世界です。

### ●棄て小舟

キリストは何も持たない。けれども、ただ一つを求めている。神さまの力を。我々も、求めるなら、キリストの力だけです。その中に自分を投げ入れる。「求める」というのは、こっちに坐っていることではない。自分をキリストの中に投げ入れること。



「己を棄てる」  
というのは、

「キリストの中へ自分を棄てる」  
ことです。キリストの中に棄身になる。棄身の態勢というのは、キリストの中に我々は自分を棄てること。

「棄身でやれ」

と言ったら、私はキリストの中へ自分を棄てる。

西郷南洲の和歌に、

「二つなき道にこの身を棄て小舟波立たばとて風吹かばとて」  
というのがある。

「波立たばとて風吹かばとて何かあらん」

ということですよ。この身は棄て小舟と同じことだ。この棄て小舟は波が立とうが、風が吹こうが決して沈まないという。南洲らしい歌だ。やはり南洲は大きな魂です。

よく、立場とか主義とか言いますね。私は立場がない。また、主義もない。或る立場をもつたらダメ、或る主義に固まったらダメ。無立場、無主義、これが本当の天的な自由の世界ですよ。「何々主義」と言うけれども、「民主主義」だとか、「何々主義」なんてものは皆ダメだ。主義に固まったら、これは観念の世界でダメなんです。

立場もない。頭場はある。神さまに、キリストにとつ捕まえられて、ぶら下げられている。人為的な立場はダメなんです。無立場というのは、もし言うなら、無という立場です。それが自由無礙の世界、大自然の如し。そういうわけで、大変、楽ではない。楽でしようがなく、力が来てしようがない。パウロが

「己を得ざるなり」

と言ったけれども、パウロも本当に福音の力が来てしようがないものだから、

「己を得ないで語っているのだ」  
という。

「黙すに疲れて耐えがたし」

とエレミヤもそう言っている。

「神の御言がやってきて、黙ろうとしても黙れない」

と。そういうのが自由無礙ということ。人間が普通言っている「自由」なんていうのはひとつも自由でない。自己に囚われている。

マルチン・ルターがヴォルムスに向かって進んで行ったときに、

「屋根の瓦ほどのサタンが来ても自分は進み行く」

と言った。本当に彼はキリストにすっかり生きていた。ルターになぜ力があつたかというのと、やはり彼にとってはキリストが一切でした。



イエスが嵐の中でも舟の中に眠っている。石枕でも草枕でも舟枕でも、至る所を枕にできる人。そういうようなところが無即無限無量の境地です。無主義であり、無立場であり、いわゆる無思想である。ということは大自然の如し、ということなのです。大自然というのはいろいろな相をもっている、無限の相をもっている。それが自由自在なんだ。

「大自然は素晴らしいなあ」

というのは、そういうことです。

### ●大変な霊止

イエスは神の力に生きていますから、イエスの求めているのは神さまの力だけだから、風と波に、

「静まれ！」

たとえば、自然の法則を抑えて静まってしまおう。大変な霊止です。私はキリストを大変なひとと言う。ということは、自分がちよつとも大変ではない。神さまという大変なものに自分を全托している。

だから、福音書を読んでいると、先に進めなくなってしまう。そこでもって瞑想して、その中に自分を投げ入れている、そういう読み方をしないとね。絶対に意味ではない。福音書は決して意味の世界ではない。現実の世界です。言葉の奥の現実の響き、力、光、それを受けとらなければ、福音書を読んでいることにならない。大変なものです、この福音書というのは。キリストのそういう現実が全部現れている。

聖書の中心は何といつても、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書です。福音書を読んでいたら、きりががない。飽きがこない。絶対に意味でないから、現実だから。信仰でもない。「信じ仰ぐ」なんていう世界ではない。私は「しんこう」は「神交」と書く。神交わりの世界です。信じ仰いでいるような二段構えの世界ではない。

私の気合は分かってくれましたね。頭ではないですよ、身体で。それなら、大変うれしい。南洲のこの言葉は私は好きだ。

「二つなき道にこの身を棄て小舟波立たばとて風吹かばとて」

人生の波風はどうでもいい。

「失敗しようが、ひっくり返ろうが、どうだっていい。絶対に滅びないぞ、本当の勝利はこつちだぞ」

と。いいですか。女の方でも非常に積極的に生きてください。

私は永遠の青年なんだ。我々はみな永遠の青年です。クリスチャンで永遠の青年でなかったらダメなんだ。キリストの生命が来てたら、年齢はとつても絶対に、魂はいつまでたつても青年です。皺が寄つても青年だ。「青年か老人か」ということは魂の生き方による。人の外貌ではない。



イエスは正に30歳そこそこで天界に行ってしまったわけて、永遠に上から我々に力を与えてくださっている。十字架で殺されて、それっぱなしでなんかでいるものか。彼は驚くべき別な次元の生命になった。だから、ローマの兵隊がみな恐がって逃げてしまった。

どうぞ、キリストに驚嘆驚倒しながら歩いていきましよう。そうしたら、楽しくてしょうがないですから。

### ●キリストに在って力が内住

「枕する所なし」は、至る所を枕にして、宿無し者だが、石枕、草枕、何でもござれと。人が迎えれば、人の所で休ませてもらう。

だから、舟の中でも眠っていれば、弟子たちが

「危ない、危ない、沈みそうです」

と言ったら、

「信仰うすき者よ」

と。ある所では「信仰なき者よ」と。

「何ぞ恐れるか」

と言った。そして、

「黙せ！」

と云えば、風と波が静まってしまった。

日蓮が佐渡に渡るときに、「波題目」といって、「南無妙法蓮華経」と波の上に棹さおで書いた波が静まったという。日蓮さんなら、それくらいのことではできたでしょう。

我々は誰でもキリストに在ってはそういう力が内住しますから。もう、「信仰」なんていう言葉は要らない。神交と書けばいい。

ゲートルはパウロの、

「我は神の中に生き動きまた在るなり」

という言葉が大好きだった。ゲートルも「神の中に生き動きまた在るなり」という魂だったから、大詩人になった。それだけの魂の詩人が日本にはいない。夏目漱石なんていったってダメなんだ。なぜゲートルが偉大かという、やはりそういう世界を持っていたからだ。それでなければ、あんな『ファウスト』なんか書けやしない。

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆おくするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、

風と海とを禁め給えば、大なる風おおいなまきとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは

如何いかなる人ぞ、風も海も従うとは』

こういうところを読んだら、キリストの中にジーツと瞑想して、そしてそのキリストの力の世界にはいる。何だか知らんけれども、

「風と波とを静める」



こののできるような力が自分の中にキリストに在って内住してくるようになってくる。とにかく、そういう次元の違った世界をだんだん我々は生活の中で頂いていかなければね。それでなければ、

### 「信仰、信仰」

なんて言ったって、いつまでたつてもつまらないですよ。いわゆる信仰なんかよした方がいい。神交わり、キリスト交わりの世界に、キリストと一如の世界に入らなくては。一如でないものはみな本ものでない、ズレている。

この聖書の世界は、キリストの世界はいかに素晴らしいか。本当にもつたいないね、聖書を読まない人は。福音書を読んでいたら、読んでいるうちに力が来てしまう。読むことが直ちに力になる。意味の世界ではないから。

### ●キリストの御腕を枕として

キリストはどこでも至る所を枕に眠ることのできたひとです。私たちもそのような、主に在っては、何が起きてもどんなことがあっても、平安である。どんなことがあっても、フランチェスコは聖名を讃えていた。我々も、どんな現実にあつても、ただ聖名を讃え讃美する。これが自然にならないとね。第二の自然にならないとね。力んでいるのではない。霊的自然性にならないと。そうしたら、それが本当の現実です。いわゆる「信仰」ではない。「神交」の世界です。

あなた方はみなそういう魂である、一騎当千である。その次元でなければ、つまらないよな。大いに一緒に楽しく勇ましく進んでいきましょう。

こういう場合でも遠慮なしに本当のことを言いなさいよ、本当の告白を。それは人を打つ。ひとつも遠慮は要りません。

### 「わが名を否む者は、我もまた神の前で否むぞ」

なんて、キリストが仰っている。イエスと一つとなつている者は皆そのような、この世の次元とは違った生き方が現実である。いわゆる信仰ではない。神交の現実で在ってください。至る所を枕とするキリスト。私たちも至る所、キリストを枕として、キリストの御腕を枕として、「主さま」と言つて眠ったら、夜の休みは安眠そのものです。

皆さん一人びとり、大事な使命をお持ちですから、人がどう思おうが、

### 「汝知りたもう」

といつて、どうぞ、神さまとキリストを相手に一騎打で生きてください。そういう方々と私は楽しく一緒にどこまでも進んでいきます。

